

Q13

「中耳炎の治療で、鼓膜にチューブを留置している子どもがいます。どのようなことに気をつけたらよいのでしょうか？」

鼓膜チューブ留置術は、滲出性中耳炎の治療の一環として行われます。

滲出性中耳炎とは、急性中耳炎を繰り返すことによって耳管（中耳と鼻の奥を結ぶ管）の働きが悪くなり、中耳に浸出液がたまっている状態をいいます。

急性中耳炎のように、耳の痛みや発熱、鼓膜の腫れなどは無く、難聴が主な症状になります。

滲出性中耳炎の治療法としては、抗生物質を中心としたお薬による治療と併用して、鼓膜切開や鼓膜チューブ留置術のように、浸出液の排出を目的とした治療が行われます。

鼓膜切開では、切った穴が一週間くらいで閉じてしまうので、効果をより長期間保つために、鼓膜チューブ留置術が行われます。

滲出性中耳炎にかかって、まず気をつけることは、お薬の治療は、耳鼻科医とよく相談することです。良くなったと自己判断でお薬をやめることのないようにします。お薬を飲みきったら、耳鼻科で鼓膜の状態を確認してもらいましょう。なかなか治りにくい病気で、繰り返しかかることが多い病気です。滲出性中耳炎にかかりやすい人は、かぜなどの感染症にかかったら、小児科や内科ではなく、耳鼻科を受診した方がいいかもしれません。

鼓膜チューブ留置術をした際に注意することは、かかりつけの耳鼻科医と相談することが必要ですが、一般的なことを説明します。

チューブ留置中は鼓膜に穴があいているので、水泳をすると細菌感染のリスクが高まります。一般的なイメージとしては、チューブの穴を通して細菌が感染すると考えがちですが、鼓膜に穴があいていることで、鼻や鼻の奥から耳管を通して、感染することが多いようです。

顔を水につける程度なら、耳栓と耳を覆うキャップをつけて水遊びをしてもいいとおっしゃる耳鼻科医もいます。水に潜るのは禁止の場合が多いですし、約束を守れないようでしたら、水泳はひかえたほうがいいかもしれません。

また、前述したように鼓膜に穴があいていることで、急性中耳炎にかかることもありますので、注意が必要です。

滲出性中耳炎は、三〜七歳くらいの子どものたいへん多く、数ヶ月耳鼻科に通ってもなかなかよくなることもある、やっかいな病気です。しかし年を重ねるとかかりにくくなるようです。かかりつけの耳鼻科医とよく相談して、粘り強く治療を続けることが大切です。

